
- 仮想 × 世界 -

綴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- 仮想×世界 -

【Nコード】

N 6 3 2 3 A

【作者名】

綴

【あらすじ】

核ミサイルの雨。遺伝子操作兵器。平和ボケした人間が望んだ『仮想』の世界？それともこれは現実の荒廃した『未来』の世界？当時遭っていた文献による一昔前の神話『聖戦』との繋がり…突如大地に現れた不思議な石『大地の涙』…石の力を支配に使おうとする独裁帝国の者達と、ただ生きるが為に戦う者、帝国の支配に反乱する者達の戦記が今、幕を開ける…

00：エピソード…【世界変革】（前書き）

【前書き】

この小説は、なりきりチャット『仮想【裏】世界』を舞台に描いた
多人数参加型小説です。参加者さんのエピソードや、スレッドの話
の展開をポツリポツリと書き連ねていきます。

更新速度はスレッドの進み具合に寄りますが、気長に読んでいただ
ければ幸いです。文章力もまだまだ拙いものですが、精進してい
きたいと思いますので、ひとつ宜しく願います。

尚、この小説には主人公が居らず、参加者さん全員が主人公のよう
な形式をとっています。キャラクター個人のエピソードの場合、そ
のキャラクターからの観点で書いたりしますが、悪しからず。

ダラリと読むことをオススメします。

00：エピローグ…【世界変革】

まさか…

こんな事になるなんて。

世の中ホント、

ワケ分かんねえ…

20XX年、近未来。

雲一つない突き抜けるような蒼天。いつものようにふわりふわりと漂っては千切れる雲の群れ…

ただ一つ違うのは

『核ミサイルの雨』

…

突然の事だった。突然が重なりすぎて所々しか覚えちゃいないが、まさかこんな事態に巻き込まれるとは思ってもみない。普通の人間で、普通の暮らしして、普通にフラッと逝っちまう。こんなつまんねえ世界だけど、とりあえず宛もなく日々を繋いでた。

『テポドン降らねーかな』

なんてたまに物騒な事も言ってみたりして、…とりあえずでいい。一言簡潔に言えば『刺激』が欲しかった訳で…！

一昔前に『聖戦』とかいう話だったか。

何やら神や悪魔が裏社会の人間に取り憑いての非現実的な大戦があったらしい。日本で禁じられた遺伝子操作実験をしたのだ、それで完成した実験体の少年が反乱を起こして片っ端から遺伝子操作動物：キメラ（？）を倒すチームの隊長になったのだ、拳げ句の果てには少年の中に植え付けられた悪魔の遺伝子が暴走を始めて神々を巻き込んだ戦いになったのだ…

本当にあつた話には到底聞こえないし、リアリティの欠片すら感じられない。むしろこの胡散臭い神話は世界各国に広がっていて、しっかり写真資料なんかに『大戦時』の主な舞台となったロンドン近郊、謎の生物の死骸、その他まだまだ謎が深く……

なんて本で読んだりテレビで観れば信じない訳にはいかないのだろう。一番最後に書かれていた描写、あれだけが気掛かりだったのだが。

- - - - -

神々の争いは絶えず

大地は歪められた

後に神々は封じられたが
大地は歪んだままだった

やがてその地脈から

『大地の涙』を滲ませて

大地は衰退してしまつた…

魂強き者

意志強き者

誇り高き者よ

汝ら人間が行き場を失う前に
力在る者は石を持て

じきに来る

荒廃の時に備えて…

- - - - -

ちょうど、これから数分後…まさか本当に世界の変革が起こり得る
とは。

『テポドン降れ』

そんな事

言っんじゃないかった…!!

00：エピソード…【世界変革】（後書き）

プロローグには、まだ参加者さんのエピソードを使っていません。少し前置きが長いのですが、次も多分微妙に長いです。更に小説内に出て来る聖戦については、また別に短編小説を書いています。

興味が湧いた方、世界観が気になる方はそちらも見ていただけると幸いです。

01：夢追侍・ユメオイビト - 〈1〉（前書き）

夢追侍

続けて書くとかかなり長いくだりになってしまいそうだったので、区切って書いていくことにします。まだ小説の投稿システムがあまり飲み込めていないので、話の段取りが最初から長いやらなんやら…出来るだけナリキリチャットで交わされた会話をそのまま織り交ぜて書いてます。

01：夢追侍・ユメオイビト・〈1〉

ああ、今日も空が高い

『オイラに掘れないモンはねえ』

《そうだろ？親方》

崩れたビル群が立ち並び、一見廃墟と言ってもおかしくない街の中をひた走る。歪んだアスファルトは所々木の板で補強しており、まるで昔の日本にある橋のようでもあった。崩れかけたビル群もまた同じように木の板でミスマッチな補強をされていて、それは長家式に居住区が連なっていた。

この妙な街こそがかつての日本首都だと誰が信じてくれるだろう？数年前、経済難の為米国に資金援助を頼んだ結果がこれだ。米国の植民地となる代わりの資金援助がどうやら最近影で結成された『独裁帝国』の導火線に火を着けたらしい。ただの嫉み。それだけで世界各地にミサイルの雨が降る御時世だ。

『世の中どこにかしてやがんぜ全く』

結局援助してくれたハズの米国も帝国側に寝返り、今では西側の大陸の殆どが帝国の傘下に引き込まれてしまった。それほど帝国側の経済力や軍事力は強大だった上に、帝国側は気付いてしまったらしい。

一昔前の聖戦で力を奮った神々の能力を封じ込めたとされる魔石

《大地の涙》の発掘や、石の力を引き出す《オーパーツ》の製造方法等々。利用できるモノは根こそぎ奪い、利用するのが帝国だ。奴等は次にそれらを使って大規模な改革を行いつもりだろう。

勿論、それ等を狙っているのは帝国だけじゃない。各地で奪われた家族の為に復讐を誓う者：反乱軍。魔石やオーパーツを採掘し、一攫千金を夢見る者：トレジャーハンターなど。あらゆる富や力を欲する者達もまた然り…

『今日こそは大層なお宝掘り当ててやんぜ…！見てろよお天道サンよお！』

そう、少年も

《トレジャーハンター》

…その、一人だ。

やがて街中を抜け、ロクに整備もされていない未だ瓦礫の散乱した道路をバイクは走り抜けていく。まだ日は高く、廃ビル群の建ち並ぶ『エドⅡシティ』と呼ばれる居住区^{コロニー}はまるで鬱蒼と生い茂る森林のように日光を遮り、それ故に内部はヒンヤリとしていた為か外に出た瞬間の外気との温度差や目映さは思わず誰もが《うわっ》と一声上げそうな位だった。勿論少年も例外ではない。唯一バイクが走っている間に肌を掠める風が少年の気を紛らわせている。

『ようやく現場の看板が見えてきたな……あれが噂の採掘場…か。』

少し遠目に鉱山のように聳えるのは一見コロニーにも似たような廃墟。錆びた鉄筋やコンクリートが散乱していながら、都市が破壊される前に普及していた色々な物品が掘り出される採掘場だ。

噂の、というのはこの《トクガワ採掘場》では一昔前の裏社会で取引されていたと言われる特殊な武器や資料に始まり、取引に使われたのだろう。昔の金までが発見されている。それ等昔の遺産に加えてあの魔石《大地の涙》を最近誰かが発見したという噂がエドゥシテイの酒場で飛び交っているのを少年は聴き逃さなかった。だからこそいつもより多少遠征をしてまでこのトクガワ採掘場に訪れてみたのである。

走り続けること数十分。結構飛ばしてきたせいか愛用のバイクは土埃にまみれ、せつかくの黒い塗装が台無しだ。しかしそれもまたワイルドな感じでなかなかいいだろうと少年は案外気に入っていた。

悠々と採掘場の敷地内に入ってくると、早速人目に付かないように瓦礫の陰にコッソリとバイクを停める。中はやはり日当たりが悪いのもあってかヒンヤリとしているが、多少湿気ているのか肌に嫌な感覚がまとわりつく。それでも意気揚々として、気合いを入れるように少年は身なりを整える。

額のハチガネのズレをシツカリ直し、肩には斜め掛け式のシヨルダ―バッグを背負い込む。バッグには護身用に野太刀が一本固定されている。荒廃して乱世の世の中だからこんな格好の人間がそこらを歩いていてもおかしくはない。

『ここが噂のトクガワ採掘場ねえ……ナルホド…噂通りの場所かもしんねえなあ……』

準備が終わると少年は採掘場の看板を見上げて不敵に笑う。それはこの先にどんな財宝が待ち受けているのかという期待からだろう。少年もこれが初めてでは無かったから、ハンターの本能が宝の匂いとやらを嗅ぎ付けているのかもしれない。

『っし…男倭^{ヤマト}…今日こそはドでけえ財宝上げてやらあ！』

バイクの荷台に載せていた採掘用の道具袋を担ぐと、ヤマトと名乗る少年は威勢良い掛け声と共に採掘場の奥へと入って行った。

01：夢追侍・ユメオイビト・へ2

ジツトリとした空気。倒壊した時に無造作に積み上げられた廃材の隙間からは雨露で溶け出した錆混じりの滴がポタリ、ポタリと落ちては真下の砂地を穿っていた。大分奥まで潜り込んだようで、もう外界の音も届かず只暗闇がヤマトを包んでいる。

『おし、この辺りまで来りゃあイイだろう…』

まだ掘りかけなのか、トンネルの出来損ないのような窪みを前にヤマトは足を止める。すると慣れた手つきでヘッドライトの一部のようなモノを道具袋から取り出すと、額のハチガネの真ん中辺りのプレートの一部を外してライト部分をセット。どうやらこのハチガネは只のアクセサリーや頭部保護の為にあるわけでは無いらしい。

『聞いた話によるとトクガワの埋葬オーバーツつてのあスゲエ高値で取引されるらしいじゃないか…』

カチリとライトのスイッチを入れると様々なガラクタが窪みの中程に埋まっているのが一目で分かる。レリーフみたいにクツキリとモノの形が浮かび上がっているのだから、あとは好奇心任せに掘り出すのみだ。

『うお…！コイツあ驚いた…！こんな光景見せられちゃアゝウズウズせずにやアいらねえよ！』

最早剥き出し状態の獲物の数々に胸躍らせ、ヤマトは夢中で窪みを掘っていく。ザクリという音になるべく最小限に抑えながら、慎重

に、慎重にツルハシを振り下ろす。

極力静かに作業しなければならぬ理由をヤマトは知っていた。むしろトレジャーハンター業を行うならば誰もが心得ている、所謂《暗黙のルール》的なモノだ。

『深追いはしねえ方が無難だろ…確かこの採掘場はヒグマ一家の縄張りらしいからな…』

今や世界中にわんさか存在するトレジャーハンター達の間には《縄張り》が存在する。それはまるで賊の一団同士で言うなれば《シマ》のようなモノで、このエリアを侵そうものなら容赦なく団ぐるみの襲撃に遭う事になる。どこまでも横暴な帝国と違うのは、人情味位だろうか。

『ちゃっちやとお宝掴んでズラかんねいと』

今ヤマトの背には一本の古い野太刀しか無い。ツルハシもいざとなれば武器位にはなるだろうが、この狭くて足場も悪い空間の中では地の利を把握しているヒグマ一家の方が有利だ。確実にかち合うのだけは避けた方がいい。ゴクリと息をのみながらヤマトは採掘に集中する。

その時

《カンッ》

何か堅いモノがツルハシの先に当たり、軽く聞き慣れない音が聞こえた。金属のような音でなく、鉄筋では無さそうだ。

『オイオイ……こりゃあ…キタンじゃないの？ “お宝” ちゃんが！』

高鳴る鼓動。

一瞬にしてヤマトの中のハンターの血が騒ぐ。軽く沸騰でもしてしまいそうな位に高ぶった感情を何とか抑えつつ、ツルハシを投げ置くと今度は慎重にノミやハケを使って掘り出していく。徐々に獲物の半身がようやく土の下から現れると、その“獲物”はヤマトの目を釘付けにした。

『キタ…キタかよ…とうとう…！噂も…馬鹿にできないモンだな！』

完全に掘り起こされ、シツカリとヤマトの手に握られたソレは如何にもといった感じで妖しく光っていたように見えた。

『コイツあ…まさかの大物かもしれない…！』

01：夢追侍・ユメオイビト・〈3〉

スラリとした白雲模様の鞘。鮮血のように鮮やかな紅で染め上げられた柄紐。鍔には珍しい月と雲のレリーフ。ヤマトが掘り出した“獲物”の姿はまさに神々しいという表現にふさわしい程美しい造りだったのだ。土砂に長いこと埋まっていたため多少くすんではいたが、その魅力は充分なモノ。粗末に扱ったらバチが当たりそうだ。

『キレイな刀……これが宝じゃなかったらなんだってんでえ。…』

軽く土を払うとヤマトは暫し見とれていた。もしこの刀が本物の古代オーパーツだったなら、遺産換金に出した場合大金持ち。出さなくとも古代のオーパーツ、ひょっとしたら不思議な能力を秘めているかも知れない。何にしる大発見だ。

『…これがアタリだったら食いつばくれる事もねえ。能力が手に入るなら帝国に復讐だって……！』

刀一本の収穫にすっかり気を善くしたのか、それからヤマトは周りを少しばかり掘って古銭らしきコインや何かの文献を見つけると、それ等無造作に道具袋の中に忍ばせていた予備の袋に放り込む。

『これだけ見つかりや鑑定もし甲斐もあるってモンだ……さてと、』

沢山の期待が詰まった袋と道具袋を担ぐと行きと同じようにコソコソと地上に這い上がって周りの様子を伺った。幸い周囲に人影は無かったが、日中の陽はもう西側に傾いている。

『ゲ。オイラとした事がチイと夢中になりすぎちまったか…早えト
コとんずらだなっ！』

陽の傾き加減を見ると結構中に居たことになる。ヤマトは出来るだけ急いで停めていたバイクの荷台に荷物を載せると、勢い良くエンジンをつかして元来た道を引き返して行った。

一方その頃

トクガワ採掘場の見張りヤグラでは…

「お？…バイク？ヒグマ一家にバイクなんかあったか…？」

すっかりゴマ粒大にしか見えなくなったヤマトを、ポカンとしながらただ見送るヒグマ一家の下っ端が一人。遠くの街道で土煙を上げて爆走する乗り物を不思議そうに眺めていた。

02：独裁帝国・ウゴメクモノ・へ1（前書き）

次は帝国側の話です。ようやく石をめぐる理由や帝国の内部の人間、帝国の立場について明かされていきます。

02：独裁帝国・ウゴメクモノ・へ1

延々とコンソールの音が鳴り響く。コンピューターが並べられたその部屋は沢山の情報を制御、あるいは新たにプログラムする操作音がやかましい。

『何ッ度も言わなくツても分かッてるツてのにネ』

その部屋の一角でかつたるそうに葉巻をふかす男が一人呟いた。やたら口調に特徴のあるこの男は帝国所属の人間なのだろうか。帝国にある72の支部のうちマルコシアスという支部に今、彼はいる。

『いッくら行き倒れ拾ッてくれたからッてコレは扱い酷すぎッじゃないッかネ』

ウンザリしきった様子で男は呟く事を止めない。独り言なのかと思いきや、突然彼の横で仕事に取り組む青年に意見を求めてみたりしている。

『…君ッもそう思わないッかネ？』

「……………」

黙々と。よほど仕事に熱中しているのだろうか。青年からは返事の一つも返される事は無く、結局男が振った会話も成立せず独り言に終わってしまった。ただ虚しくキーボードのカタカタという音が室内に響く。

『仕事ッの虫ッには通じないみたいネ……………』

殺伐としてどこか空虚な空気の中、この不思議な語りをする男は仕事へと戻っていった。

その様子はくわえた葉巻から漏れ出す煙のように。イマイチ掴めぬ言動だけを残して

独裁帝国。

いつ頃から出来たのかはわからないが、元々独裁政権を強いていた国だった。それがマフィアや闇医者：所謂《裏社会》の人間達の思想を取り込んで現実化された無法地帯となつたのが事の始まりだ。

気に入らない者や刃向かう者には容赦なく破壊という名の鉄槌を下し、配下に引きずり込むのは当たり前。勿論それなりの武力や財産も兼ね備えているのだが、最早世界の半分を支配しておきながらこの期に及んで何を望むのか。本当の目的は定かではない。

莫大な領地を持つ帝国のそれぞれのエリアを束ねる七人の将は《セブンズ・ペイン》と呼ばれ、七つの大罪を意味するその通称は今や万国共通語のようにあちこちに知れ渡っていた。

分かっているのは彼等もまた、過去の聖戦の後に突如として採掘された力秘めし宝石：《大地の涙》を探し、利用しているという事

大規模な戦争の中、初めは財産目的で発掘していたこの石が魂の底の《眠れる力》を呼び醒ますキツカケになるという事を先に発見したのは皮肉にも帝国側。石の力を引き出すべく《石の力》を武器や魂に充填する方法を思いついた彼等は次第に個々で石の力を引き出

せる事を知る。

それは勿論《覚醒》するには条件があつたのだが帝国に壊滅的ダメージを受けた国の者達もまた、葬られた者達へのやり場のない怒りや復讐心をたぎらせて石を使いこなす者が現れる。武器に宿すものあれば魂に宿すものあり…魂の中に鬼や獣がある者は、その力までもを引き出した…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6323a/>

- 仮想 x 世界 -

2011年1月6日14時46分発行